

# トレンズの『トゥック宛て書簡』（1840年）

\*竹 内 洋

Robert Torrens' *Letter to Thomas Tooke* (1840)

TAKEUCHI Hiroshi

## Abstract

Robert Torrens, as the author of *Letter to Melbourne* (1837) which included the first printed proposal of separation of the Bank of England into two departments and *Letter to Thomas Tooke* (1840), has emerged as one of main figures of the Currency School in 19th century Britain. But there was a theoretically big difference between Torrens and Overstone, the leader of the school, in definition of money. Torrens thought deposits 'perform the functions of money just as effectually as the coin and bank notes actually in circulation' (*Letter to Melbourne*). Overstone was different at this point from Torrens and was rather the same with Tooke in distinguish them. In 1837-1840 Torrens intended to be in Overstone's group and make the Currency School with him but Overstone could not accept Torrens as a member of his group because of the difference in the theory of money.

**Key words** : Robert Torrens (ロバート・トレンズ)  
Thomas Tooke (トーマス・トゥック)  
Overstone (オーヴァストーン)  
Currency controversy (通貨論争)

## 1. 問題

19世紀イギリス通貨論争は、1837年以降、多産の時期に入る。同年、トレンズ『メルボーン卿宛て書簡』（第一版、Torrens, 1837a）に続いて、オーヴァーストーンの最初のまとまった著作である *Reflections suggested by a Perusal of Mr. J. Horsley Palmer's Pamphlet on the Causes and Consequences of the Pressure on the Money Market* (Overstone, 1837a. 以下では単に *Reflections*. と略記する.) が刊行された。それに対するトレンズの激賞 (Torrens, 1837b, O'Brien, 1971, p. 22.) があり、その同じ年のうちに同じ著者による *Further Reflections on the State of the Currency and*

*the Action of the Bank of England* (Overstone, 1837c. 以下では *Further Reflections*. と略記する.) も刊行された。同年中にはトレンズも『メルボーン卿宛て書簡』の第二版 (Torrens, 1837c) を出している。また、翌1838年にはノーマンの *Remarks upon Some Prevalent Errors with Respect to Currency and Banking, and Suggestions to the Legislature and the Public as to the Improvement of Monetary System* (Norman, 1838) も出た。

それらはいわゆるパーマー原則の効果を問うた点を一つの共通項にしていた。オーヴァーストーンの *Reflections*. は直接にはその直前に刊行されたパーマーの *The Causes and Consequences of the Pressure*

---

\* 宮城教育大学教育学部社会科教育講座

*upon the Money-Market; with a Statement of the Action of the Bank of England from 1st October, 1833, to the 27th December, 1836*, London (Palmer, 1837a) に対する批判として著されたものであった。それに対してパーマーがオーヴァーストーンの批判に対する反論として *Reply to the Reflections of Mr. Samuel Jones Loyd* (Palmer, 1837b) を刊行するなどして、論争は次第に熱を帯びたものとなっていった。その背景には1836～37年の金融危機があった (O'Brien, 1971, p. 75.)。その問題へのアプローチを通じて、通貨学派も徐々に形成されていったのである。

他方、パーマー原則の明示 (House of Commons' Report, 1832, Question 72, p. 11.) から1837年に至る一連の諸事実と諸説とについて、トゥックは『物価史』第2および第3巻 (Tooke, 1838, 1840) において詳細に跡づけ、その中でトレنزの『メルボーン卿宛て書簡』に言及している。トレنزに対する批評は『物価史』第4巻 (Tooke, 1848) でも継続された。トレنزによれば、『トゥック宛て書簡』 (Torrens, 1840) はこれらのうちの『物価史』第3巻に対する反論として執筆されたものである (*Ibid.*, p. 5.)。

ロビンスによればこれらの中でトレنزの『メルボーン卿宛て書簡』 (第一版) が論争の開始を告げる号砲であった<sup>(1)</sup>。その途中からトゥックらの後の銀行学派に属する人々が介入したのである。(Robbins, 1958, p. 93.)

その一方では、*Reflections*. に対するトレنزの激賞にもかかわらず、後の通貨学派の中心を構成する三人のうちの二人、オーヴァーストーンとトレنزとの関係も一枚岩ではなかった。そのことは後年にオーヴァーストーンのトレنزに対する怒りとなって表わされることになるが (Overstone, 1857b), その点はまだトレنزの意識するところには至っていないように見える。トレنزはオーヴァーストーンに親近感を覚え、そのことに励まされながらであろう、『トゥック宛て書簡』においてもひとまず『メルボーン卿宛て書簡』におけると同様の議論を継続することになったように見える。

『メルボーン卿宛て書簡』から『トゥック宛て書簡』に至る時期は、トレنزの著作史においては、通貨主義への歩みをいよいよ本格的に進めた時期だと言うことができよう (竹内, 1997, 1999, 2000, 2002.)。その際、オーヴァーストーンとの交流の影響は大きかったであろう。通貨主義の一つの指標を仮にイングランド銀行二部門分割案に求めるとするならば、トレنزの『メルボーン卿宛て書簡』 (第一版) はその案を提示した最初の印刷物であったとされ、その限りにおいてそれは通貨主義の誕生を告げるものであったといえることができるが、その案の素描は既にPolitical Economy Clubの1832年5月3日の例会においてオーヴァーストーンによって提示されていた (Political Economy Club, 1921, p. 39.)。それに学んだことをトレنزも後に著した *The Principles and Practical Operation of Sir Robert Peel's Act of 1844 explained and defended*, 2nd ed., London, 1857 (Torrens, 1857) において認めている (Torrens, 1857, pp. xii-xiii.)。その点を考慮に入れてみると、この時期におけるトレنزの通貨主義への歩みはやはりオーヴァーストーンの影響を多分に被りながらのものであったとすることができるだろう。

だが、トレنزがオーヴァーストーンに親近性を覚えた度合いに比較すると、オーヴァーストーンがトレنزに対して覚えたそれは必ずしも同じ程度に大きなものではなかったように見える。O'Brienの編集になる『オーヴァーストーン書簡集』 (O'Brien, 1971) を見る限り、その晩年に至るまでの膨大な交信の中でトレنزとの間に交わされたものの占める割合は極めて小さいものであった。オーヴァーストーンの主な交信相手はノーマンであった。実際、923通に上る同書所収の全書簡中に占めるトレنزとの交信数はわずかに55通であり、それらのうちオーヴァーストーンの側からトレنزに宛てたものは3通を数えるに過ぎなかったのに比較して、ノーマンとの交信数は実に391通でそのうちオーヴァーストーンからノーマンに宛てたものが369通であったから、オーヴァーストーンが抱いた親近感についてはトレنزはノーマンに遠く及ばない。また、交

(1) Palmer, *The Causes and Consequences*. が『メルボーン卿宛て書簡』への批判を含むという指摘が当時においてあったが (Ricardo, S., 1837, pp. 10-11, Robbins, 1958, p. 93, 峰本, 1978, 148ページ.), パーマーが同冊子執筆のどの時点でトレنزへの反論を意識し始めたかについてはわからない。

信の時期を見ても、オーヴァストーンはノーマンと恒常的に交信しているのに対して、トレنزとの交信は何か実際的な問題が生じた際に限ってトレنزの側から集中的になされたに過ぎない。それは具体的には主として1848年第一版刊行の著書 *The Principles and Practical Operation of Sir Robert Peel's Bill of 1844 explained and defended*, London, 1848 (Torrens, 1848) についてオーヴァストーンの助言を求めたとき、1858年の *Edinburgh Review* の記事 (Torrens, 1858a) 執筆にあたってやはり助言を求めたとき、であり、それ以外の時期に恒常的に交信していたという証拠は O'Brien 編の『書簡集』に基づく限り見出すことができない (O'Brien, 1971, p. 9.)。それ故、われわれが通貨学派と言う場合、それが最初から強固な一体性を持っていた集団であったという前提に立つことには、その限りでは、十分な根拠があるとは言えないのである<sup>(2)</sup>。そこで、トレنزの諸著作を取り扱う際にも、それらをはじめから通貨主義を構成しているものとして前提すべきではなく、さしあたりはトレنزの独自の思考を表わすものとして捉えるべきだということになるだろう。

本稿は、このような限定のもとに、まずトレنزの1837年の著作『メルボーン卿宛て書簡』から1840年の著作『トゥック宛て書簡』に至る諸論議の意義を明らかにし、そのうえで後者がトレنزの通貨主義者としての形成過程において持つ意義を、同著に内在するとともに、必要な限りで同時代の関連文献とも結びつけながら、解き明かそうとするものである。

## 2. 『メルボーン卿宛て書簡』以後の諸論議

### (a) トウックによる批評

『トゥック宛て書簡』は『メルボーン卿宛て書簡』で提起されたイングランド銀行の二つの部門への分割

案に対するトゥックの『物価史』第3巻(1840)での批判に対する反論とされているが、『メルボーン卿宛て書簡』に対するトゥックの批判は『物価史』第2巻(1838)で既に現われていた。トゥックのトレنزに対する批判は『物価史』第4巻(1848)でも繰り返されている。『物価史』は第2巻が1838年刊行、第4巻が1848年刊行だから、トレنزに対するトゥックの批判は前後10年にわたり、執拗になされたことになる。

他方、トレنزの側も、1840年に『トゥック宛て書簡』を刊行したことに止まらず、2年後の1842年には *A Letter to Right Hon. Sir Robert Peel* (Torrens, 1842) を刊行し、1844年には *An Inquiry into the Practical Working of the Proposed Arrangements for the Renewal of the Charter of the Bank of England and the Regulation of the Currency* (Torrens, 1844) を刊行して、通貨学派の中心人物としての地歩を固めていく。

そこで、『トゥック宛て書簡』に至る1837~40年の時期がその後に続く本格的な論争の開始期としての意義を持つとするなら、そこには双方の側からの論点提出の過程が見られたであろう。そしてその限りで、『トゥック宛て書簡』の分析に先立って、双方の問題関心を概観することが必要となる。ここでは、まず『物価史』第2巻の叙述に基づいてその点を概観することが有益であろう。

トレنزに対する『物価史』第2巻での批判はその第10章第6節に見られる。同節の課題は次のとおりである。

「1833年から1837年末にいたる期間に商品市場および株式市場に起こったこととして、これまで一般的に記述してきた諸変動にたいして、通貨流通の状態がどの程度まで原因結果の関係をもって考察され得るか(後略)。(Tooke, 1838, p. 279, 邦訳258ページ.)

(2) オブライエンも通貨学派の主要メンバーであるオーヴァストーンとノーマンとトレنزとの間に「強固な一体性」が存在したことを認めているが、それは三者の交流の当初からのものではなかった。オブライエンによればオーヴァストーンとトレنزとの関係が密接なものになるのは1844年以降のことであり、具体的には1848年刊行の *Principles*. (Torrens, 1848) の執筆過程においてトレنزがオーヴァストーンに支援を求めたことによる (O'Brien, 1971, p. 9.)。『オーヴァストーン書簡集』(O'Brien, 1971) に収録されているトレنزのオーヴァストーン宛て書簡52通の日付を見ても、最初の一通は1847年9月30日付であり、それ以降 *Principles*. の刊行に至るまでの短期間に15通を数えている。このことはオブライエンの指摘の正しさを物語るものであるが、しかし1844年以前のトレنزは何故にオーヴァストーンの十分な信頼を勝ち得るまでに至らなかったのかという問題は残る。それはつまりは1837年に『メルボーン卿宛て書簡』でイングランド銀行二部門分割を主張したことも通貨学派の一員たるに十分な資格証明ではなかったということであろう。オーヴァストーンはこの時期のトレنزの主張の中に彼を自らの仲間として迎え入れることを躊躇させる何かを感じていたということになる。

トゥックはこの課題に答える中でパーマー原則に言及し、イングランド銀行の行動を批判するにおいてオーヴァストーン（当時はまだSamuel Jones Loydであったが、本稿ではオーヴァストーンという呼称で統一する。）の*Reflections*. (Overstone, 1837a) に同調している。

「同書 (*Reflections*. —引用者) は、イングランド銀行が1835~36年の秋と冬にその準則を破ってその証券<保有高>を拡張し、地金<保有高>が急速に減少しつつあるときに証券をその準則を超えて過剰に保有しつづけたその行動にたいする、強い非難を内容とするものであった。(中略) 彼の評言に、私は完全に意見をおなじくする。」(Tooke, *ibid.*, p. 328, 邦訳303-4ページ。 < >内は訳者。以下同。)

トレنزに対する批判はここに言及された問題の中での預金の捉え方に関するものである。トレنزは預金を「鑄貨および銀行券と全く同様に有効に、貨幣の機能を果たすもの」(Torrens, 1837a, p. 11, 1837c, p. 11, Tooke, *ibid.*, p. 337, 邦訳312ページ。)と捉え、そのうえで、銀行券の増加がそれに何倍かする預金の増加を惹き起こすことがその帰結としての破綻を準備すると考えた。そしてそのような自説を補強するものとして、トゥックがそれ以前に『グレンヴィル卿宛て書簡』(Tooke, 1829a)において採録したペニンントンの書簡(Pennington, 1829?, Tooke, *ibid.*, pp. 117-127, Torrens, 1837c, pp. 67-75。)と同じペニンントンが自分に寄せたとする書面(Pennington, 1836-7?, Torrens, *ibid.*, pp. 76-80。)とを自著末尾に採録したのであるが、トゥックによれば、トレنزは預金の捉え方においても自説補強のためにペニンントンに依拠したことにおいても間違ったのである。そのことはペニンントンも

認めていたことであり<sup>(3)</sup>、それ故、『物価史』第2巻でトゥックはトレنزの預金論を批判するとともに、併せてペニンントンからトゥックに宛てたもう一つの書簡(Pennington, 1838)を附録として採録したのである(Tooke, 1838, pp. 369-378, 邦訳344-54ページ。)。ペニンントンの所見は次のとおり、トレنزの立場に対する重要な批判を含むものであった。

「土台<基本通貨>には対応する拡張ないし収縮が見られないのに、当の預金が大きく増減することがあり、したがってイングランド銀行券の流通に変化がなく同一のままであっても、首都における貨幣の量は、ある時期には他の時期より大きかったり小さかったりすることがあり得る(後略)。」(Pennington, 1838, Tooke, *ibid.*, p. 369, 邦訳345ページ。)

「トレنز大佐が想定していたと思われるように、イングランド銀行が100万<ポンド>の銀行券を発行することにそれが500万<ポンド>の預金の基礎をつくり出し、同行が100万<ポンド>の銀行券を通貨流通から回収することにこれがこれらの預金の上に5倍の縮小を引き起こすというようなことを、私は考えたことはありません。」(*Ibid.* 邦訳同上。)

これに続いて1840年に『物価史』第3巻が刊行され、その第4章第1節においてトレنزによるイングランド銀行二部門分割案への批判がなされた。それはトレنزに対する酷評と言ってもよいほどのものであり、後年における1844年銀行特許法の停止を予言する内容を含んでいた(Tooke, 1840, pp. 178-9, 邦訳169ページ。)。同様の批評は1844年刊行の『通貨原理の研究』(Tooke, 1844)では『トゥック宛て書簡』への批判として展開され、その批判は『物価史』第4巻に採録された(Tooke, 1848, pp. 285-9, 邦訳308-12ページ。)

(3) 『メルボーン卿宛て書簡』(第二版, Torrens, 1837c)「附録」に採録されたペニンントンの書面は二通で、その「附録I」が『グレンヴィル卿宛て書簡』に採録された書簡である(Pennington, 1829?)。「附録II」(Torrens, *ibid.*, pp. 76-80。)にもペニンントンの別の書面が一部採録されており(Pennington, 1836-7?), それは日付も宛名も記されていないものであるが、それについてトレنزは「もっと近年に自分に与えられた」(Torrens, *ibid.*, Advertisement to the Second Edition, p. 4.)ものと述べており、ロビンズも同書面がトレنز宛てのものと認めている(Robbins, 1858, p. 303.)。ただ、「附録I」に採録の書簡が1829年以前のものであり、『メルボーン卿宛て書簡』が1837年刊行であることを考慮すると、この「もっと近年」の範囲は相当に広い可能性を否定しない。何れにしても、これらの書面はトレنزによれば「預金は貨幣の機能を果たすという原理、一定額の現金はそれよりもっと多額の預金の基礎をなし得るという原理」の「作用を詳細に説明するもの」(Torrens, *ibid.*)だということであるから、これによってペニンントンの立場は不明確になるかに見えるが、ここでは『メルボーン卿宛て書簡』(第二版)刊行後の1838年に書かれ『物価史』第2巻に採録された書簡および1840年刊行の『物価史』第3巻の執筆終了直前にトゥックのもとに寄せられたとされる(Tooke, 1840, p. 279, 邦訳258ページ。)書簡におけるペニンントン自身の文言に基づいてトゥックに従うのが妥当であると思われる。なお、ペニンントンの主張の変化の軌跡については峰本(1978)に詳しいが(同, 149-54ページ。), 上記書簡についての言及は同書にない。

トゥックによるこれら一連の批判の概観は、トレンズに対して提起された論点がイングランド銀行二部門分割の効果問題にとどまらず、諸物価の相反する動向をどのように説明するかという問題や預金運動の原因と効果の問題をも含んでいたことを示すであろう。それに対して『トゥック宛て書簡』のトレンズはイングランド銀行二部門分割の効果の問題以外のこれらの諸問題にも十分な関心を持っていたということが出来るだろう。ここで『メルボーン卿宛て書簡』から『トゥック宛て書簡』直前に至るトレンズ自身の関心の所在をさらに立ち入って明らかにするため、次に『トゥック宛て書簡』執筆に至る時期におけるトレンズ周辺の問題関心を概観してみることにしよう。

#### (b)オーヴァーストーンの問題関心

トレンズの通貨主義者としての歩みについては1833年4月22～24日の下院演説以降にはじまるものであることが指摘されている (*Parl. Debates*, 3rd Ser. XVII, pp. 540-548, Robbins, 1958, pp. 89-90, O'Brien, 1965, pp. 269-70, 竹内, 2000, 75-6ページ。)<sup>(4)</sup>。『メルボーン卿宛て書簡』はその歩みの向かう方向を明確に示したものであるが、同書簡の公刊には前提があり、それが1832年5月3日のPolitical Economy Clubにおけるオーヴァーストーンのイングランド銀行二部門分割案提起であったことは既に見た (Political Economy Club, 1921, p. 39.)。他方、『メルボーン卿宛て書簡』第一版刊行直後の1837年2月には *Reflections* が刊行され<sup>(5)</sup>、それに対してその刊行から日を置かずしてトレンズは *The Morning Chronicle* 紙に激賞とも言えるほどの批評を寄せたことも見たとおりである<sup>(6)</sup>。

オーヴァーストーンの *Reflections* は40ページほどの

短著である。その意義についてはトゥックの『物価史』をはじめとして既に指摘がある。*Reflections* はその直前に刊行されたパーマーの *The Causes and Consequences* (Palmer, 1837a) に対する批判の書であった。同書は、1836年の逼迫の原因をイングランド銀行ではなくその直前期における他の株式諸銀行の行動に求めたパーマーに対して、その責任はそれらの株式諸銀行ではなくむしろパーマー原則を逸脱して発券拡張を推し進めたイングランド銀行にあること、そしてそのようなイングランド銀行の行動は同行が発券と預金、割引との相矛盾する業務を一行において兼務していることに基づいていること、その限りにおいてパーマー原則は遵守困難なものであるにもかかわらずイングランド銀行は同原則を遵守しているかのように装うことによって公衆に対して正確な金融情報を提供する義務をも怠ったこと、以上を指摘し、そのうえでイングランド銀行を発券部と預金、割引部とに業務分割すべきことを主張したものである。(Palmer, 1837a, Overstone, 1837a, Gregory, 1928, pp. 58-9, 邦訳58-9ページ, Tooke, 1838, pp. 279-343, 邦訳258-317ページ。)

このような内容を持った *Reflections* を真っ先に取りあげたのがトレンズであった<sup>(7)</sup>。*Reflections* の刊行が1837年2月中旬から後のことであり、トレンズの批評が掲載されたのが3月3日であった。その内容についてオブライエンは「極めて好意的に受け取られた。」と述べ (O'Brien, 1971, p. 22.)、その例としてトレンズの批評を引いている。*The Morning Chronicle* 紙の同じ号には *Reflections* の 'entire pamphlet' (Torrens, 1837b) も掲載された。その中にはオーヴァーストーンに好意的な立場にある者の代表としてトレンズの名が挙げられているのも見られるとおりである。トレン

(4) この演説はトレンズの「転換」を示すものとされるが、その演説の冒頭でトレンズはるか以前の著書 *Comparative Estimate* (Torrens, 1819) の一節を読み上げて自らの立場を示している (*Parl. Debates*, 3rd Ser. XVII, p. 541.)。このことから、この演説が理論上の何から何へのどのような転換であったのかについては別に考察を要するものとなる。

(5) *Reflections* の刊行時期が2月であることについては、*Further Reflections* の冒頭の記述から推定することができる (Overstone, 1837c, p. 6. なおページは *Tracts* (Overstone, 1857a) による。以下同.)。また、*Reflections* において利用されているイングランド銀行勘定の最後のものが同年2月10日のものであることから (Overstone, 1837a, p. 18.)、それが2月中旬以降であることも明らかであろう。

(6) この批評がトレンズの手になるものであることはオブライエン (O'Brien, 1971, p. 22.) の指摘による。ただし、同批評中でその筆者は掲載紙である *The Morning Chronicle* を指して 'our journal' と記していることから、同紙とトレンズとの関係如何によっては筆者は必ずしもトレンズでない可能性を否定しないが、ここではオブライエンに従う。

(7) *Reflections* の刊行が2月中旬以降、トレンズの批評が掲載された *The Morning Chronicle* が3月3日刊だから、トレンズの批評は日を置かないものであった。クラナムによって「素人経済学者 (amateurish economist)」(Clapham, 1966, p. 173, 邦訳, 189ページ。) と評された1837年のトレンズではあったが、先にPolitical Economy Clubの討議においてオーヴァーストーンのイングランド銀行二部門分割案に接し、そこで学んだ成果をこの年に『メルボーン卿宛て書簡』として公表し得たほどのトレンズにとって、*Reflections* の内容は確かに理解し易いものであっただろう。

ズについてはこうしてオーヴァーストーンと同じ陣営に属するものとして評価が定まりつつあった。

この批評はイングランド銀行が発券と預金との二つの業務を同時に担うことの矛盾、その矛盾を回避するために両業務を部門として分割すべきこと、株式銀行の擁護、イングランド銀行勘定の公表の仕方への批判の各点を簡潔に述べたものである。それはこの前後に相次いで公刊されたオーヴァーストーンおよびトレنزの主張を重ねて提示したものであり、その限りでそこに『メルボーン卿宛て書簡』から『トゥック宛て書簡』に至る過程でトレنزの思考に変化や進展があったことを示すものではない。それはトレنزがオーヴァーストーンの陣営にあることを重ねて示したに過ぎないのであった。

*Further Reflections.* は前著 *Reflections.* の内容を反復するに止まらず、なお進んでイングランド銀行を発券部と預金、割引部と二分すべき理由についてより立ち入った基礎づけをしたものである。イングランド銀行を分割すべき理由について、同行は銀行である限り通貨管理者として発券収縮すべきときに預金、割引業務の中心的担い手としてむしろ発券拡張をせざるを得ないという矛盾を解消しなければならないということが詳細に述べられた。

その通貨管理の方法は紙券通貨の調節を純粋金属通貨の場合のそれに一致させるというもの、具体的には外国為替相場の動向を規準にして発券高を調節するということであった。この方法によって通貨価値を維持するとした、すなわちそれ自体として内在的価値を持たない紙券通貨の価値を内在的価値を持つ金属通貨の価値に一致させるとしたのである。そのことの意義についてオーヴァーストーンは次のように述べている。

「紙券通貨を採用するにおいては我々は、その妥当な価値を維持するため、その数量を規制するための厳格かつ適法な準則の採用に不可避免的に依存せざるを得ない。すべての商品の価格はその（通貨の——引用者）価値がそのようにして維持されることをあてにしているし、社会の債務者階級と債権者階級との相互の関係も同じである。」(Overstone, 1837c, pp. 35-6.)

また、通貨の膨張の帰結について次のように述べている。

「……その行きつくところは何であろうか。それは人と人との間の取引の混乱である。すなわち物価が暴力的に攪乱され、異なる諸階級の相互の契約 [condition] が正義に反して変更されることである。」(Ibid., p. 37.)

オーヴァーストーンの関心は、だから、1830年代の過剰取引の原因はイングランド銀行か他の株式諸銀行かという対立の中で他の株式諸銀行を擁護することにあつたに止まらないものであつた。その関心は通貨と物価との関係に、さらには債権者と債務者との関係に及んでいた。イングランド銀行二部門分割案のねらいは通貨価値の安定維持を図ることに置かれた。そのためには銀行券発行を規制する準則を逸脱する性格、銀行としての性格を発券機能から分離する必要があると考えられた。そのような主張の背景にこれらの問題があつた。

このことはオーヴァーストーンが通貨管理の問題にかかわりを持つに至った動機を示唆しているように見える。そこに一銀行業者としての立場を見出すことは容易であるように見える。このことは後の銀行学派との論争を性格づける際にも留意されるべき点であると思われる。通貨と物価との関係という論点がかうして明示された。上で言及した預金の性格をめぐる問題もこの文脈の中で位置づけを与えられる必要があつたと言えよう。

トレنزは *Further Reflections.* で開示されたオーヴァーストーンのこのような問題関心を把握していただろうか。この問題は『メルボーン卿宛て書簡』および *Reflections.* への批評に続くトレنزの次の著作である『トゥック宛て書簡』の内容によって知ることができよう。そこで、節を改め、『トゥック宛て書簡』の分析に進むことにするが、なおその際にもトゥック『物価史』第2巻の叙述を参照することが有益であろう。

### 3. 『メルボーン卿宛て書簡』から『トゥック宛て書簡』へ

#### (a) トゥックによる批判の意義——預金の捉え方

既に見たように『物価史』第2巻におけるトレنزに対する批判は預金についてのトレنزの理解に向けられている。トレنز自身は預金を「鑄貨および銀行

券と全く同様に有効に、貨幣の機能を果たすもの」と規定していた。それに対して、上に述べたように、トゥックはペニントンの書簡を採録することにしたのであったが、その際トゥックは次のように述べた。

「預金およびその運用の方法と程度が通貨の量と価値におよぼす効果について……(中略)……これらの点はかなり重要な点であり、またペニントン氏はそれらについてきわめて科学的な見解を持っている……。」(Tooke, 1838, p. 338, 邦訳313ページ。)

この問題に対するペニントンの解答は次のとおりである。

「銀行家たちの譲渡可能な帳簿債務 (transferable book debts) や約束手形は、金属貨幣の代りとして使用されるとはいっても、その額が増減するたびごとに、必ず諸商品の価格にこの増減に対応するような影響を、与えることにはならない……。」(Pennington, 1838, Tooke, 1838, p. 375, 邦訳351ページ。)<sup>(8)</sup>

そこで、先に見た点と併せてトレンズに対するペニントンの批判をまとめてみると次のようになるだろう。第一にイングランド銀行券の流通高の変動は預金の増減に直接は影響しないこと、そして第二に預金額の増減によって一般物価に影響を及ぼすことはないこと、以上二点である。これら二点を踏まえて、トゥックは1836～7年の「禍害」の原因について次のように述べることができた。

「……誤りは、その(イングランド銀行の——引用者) 発券の運営にあったのではなく、その預金および預金がそれに運用された有価証券の運営にあった」(Tooke, 1838, p. 339, 邦訳314ページ。)

これら二点はトレンズ『メルボーン卿宛て書簡』の主張を根底から揺るがすものであろう。何故なら、第一にイングランド銀行券流通高の増減は預金の増減に直接影響しないとすれば、銀行券流通高を調節することによって預金増加を規制しようというトレンズ案は

無意味となる。また第二に預金額増減が一般物価に影響を及ぼすものでないなら、その限りで預金の変動に目を光らせる必要もないことになる。

問題は預金の運用の規模と方法とであった。その点についてトゥックは1835年秋における西インド補償関連の預金および同年における東インド会社からの借入れのそれぞれの受入によって急増したイングランド銀行の預金の運用とその帰結とを詳細に分析し、次のように述べている。

「株式諸銀行の活動が、彼らの預金と信用をたんなる対人信用にもとづく割引や貸付の大きな拡張に不当に運用することによって、株式投機やアメリカ貿易においてはなほだしく度をこして見られた過剰取引に、より大きなそしてより長期にわたる機会を許したことは、疑うことができない。しかし、イングランド銀行が、1835年の秋に金融業者にたいする大規模な貸付によって、巨額にのぼる再割引の資源を提供したという事実がなかったとしたら、株式諸銀行も、割引と帳簿信用を彼らが実際に行なったほどにすすめることはできなかったろう。」(Tooke, 1838, pp. 337-8, 邦訳312-3ページ。)

ここに示されたトゥックの立場を先に見たオーヴァーストーンの立場と比較することは有益であろう。両者ともイングランド銀行に対して株式諸銀行を擁護する立場に立っている点は共通である。違いは、発券の運営が問題なのか、それとも預金の運用が問題なのか、であった。これらのうち、オーヴァーストーンは前者の立場に立ち、後者の立場にはトゥックが立つ。そのトゥックは、イングランド銀行がその「準則を破ってその証券<保有高>を拡張し、地金<保有額>が急速に減少しつつあるときに証券をその準則を超えて過剰に保有しつづけたその行動にたいする、強い非難」に「完全に意見をおなじくする」(Tooke, 1838, p. 328, 邦訳303-4ページ。)と述べた一方で、発券管理が一般物価に及ぼした影響については次のように否定した。

「諸価格にかんしては、多かれ少なかれ過剰取引の明らかな結果であった綿花・絹・および茶を例外として、異常な変動はなかった。」(Tooke, 1838, p. 327, 邦訳303ページ。)

(8) ペニントンの書簡中の「帳簿信用」「帳簿債務」の語が預金を意味するものであることは、同邦訳351ページの「訳注[1]」を参照。

論点は収束しつつあった。そのことに伴って通貨学派と銀行学派という相対立するグループもまた形を整えつつあったと言えよう。トレنزの『トゥック宛て書簡』は、そのような問題状況のただ中に刊行されたのである。

#### (b) 『トゥック宛て書簡』のトレنز

『トゥック宛て書簡』は『物価史』第3巻第4章第1節においてなされた『メルボーン卿宛て書簡』に対する批判への反論である。それはイングランド銀行がトレنزの主張するように二つの部門に分割された場合に起こるであろう混乱を指摘したものであった。トレنزは『物価史』第2巻が提起した論点にはさしたる関心を払うことなく、自らに直接向けられた批判への反論に傾いたように見える。トレنزはその課題と方法を次のように述べた。

「あなたは、イングランド銀行の業務を二つの別個の部局に分割することは、発券部における過剰取引<過剰発行>を防止するであろうけれども預金部における過剰取引を防止しないであろうと主張なさるのですが、これにたいして私は反対に、提案されている二部局への分割は、両方の部局における過剰取引を防止するであろうと主張するのです。分割がどのようにしてこの二重の効果をもたらすかは、つぎの例によって示されるでしょう。」(Torrens, 1840, pp. 10-11. 訳文は藤塚訳『物価史』第4巻, 309ページによる。< >内は訳者挿入である。)

書簡本論はこの問題に費やされたが、それは過剰取引の発生に至る過程について例解したのではなく、その意味でトレنز自らの課題に十全に答えたものではなかった。それは偶発的にも起こり得る金流出が惹き起こすであろう結果を両方の場合について述べたものであった。その結果は、発券部においては地金保有高、通貨発行高ともの減少、預金部においても預金、証券保有高および銀行券準備のそれぞれの減少、であった (Torrens, *ibid.*, pp. 11-12.). そのうえで、トレنزは次のように述べた。

「これらの変化の結果が、通貨流通高を収縮させることだけでなく、割引および貸付によって過剰取引をもたらす力が制限されることにもなるということは、自明のことです。」(Torrens, *ibid.*, p. 12. 訳文同上310ページ。)

この場合の問題は、急激な信用喪失 [discredit] をいかにして阻止するかということであり、トゥックもその問題意識から先に『物価史』第3巻のトレنز批判を著したのであったが、このようにトレنزがそのことに依然として無理解であったため、トゥックは『通貨原理の研究』においてトレنزの例解が想定した金需要発生<sup>9</sup>の帰結についてあらためて要言したうえで次のように述べた。

「200万ないし300万<ポンド>の銀行券が、公衆のあいだに流通する額から強力に取り去られるよりも前に、ロンドンの銀行家たちの準備の逼迫が、極端なものになるに違いない。」(Tooke, 1844, p. 108, 1848, p. 288, 邦訳311ページ。傍点引用者。)<sup>9</sup>

つまり、トレنزが想定する銀行券発券高の縮減が効果を発揮する前に、信用喪失が行き渡り、しかもそれはなお激烈なものになるというのである。その点を理解しないトレنزに対する批評は次のようなものである。

「トレنز大佐はこの点について適切な考えを持っていないように私には思われる。商業界や銀行業に実際に精通していない著述家の場合、このことは不思議とするにはあたらない。しかし<部局の>分割の方策にたいする他の支持者たちが、その中には商人や銀行家たちを数えているのに、この点についてこれほどまで無知であるように思われるのは、まことに意外である。」(Tooke, *ibid.*, 邦訳同上。)

『トゥック宛て書簡』のトレنزに対するトゥックの批判は以上である。それは見られるように手厳しい言葉で終わったが、それはトレنزの周辺にいた「商人や銀行家たち」に対しても「無知」という批評を浴びせている。その中にオーヴァストーンがいたことは

(9) この点については1844年法についてのマルクス『資本論』第3部の批評が適切なものとして認められるであろう。Marx (1894), SS. 570-1, 邦訳714-5ページ。

間違いないだろう。こうして、トゥックとオーヴァストーンとをそれぞれの中心とする両陣営の争いは次第に激しいものになっていくだろう。

#### 4. 結論と展望

先に見たように、後の通貨学派を構成する人々は未だ一体のものではなかった。それらの人々は、この時点では、イングランド銀行を二部門に分割すべきことについて一致していたが、その政策の根底にある通貨や信用諸用具の把握については未だに一致はなかった。1837年2月27日付けオーヴァストーンからノーマン宛て書簡はそのことを示すものである(Overstone, 1837b, O'Brien, 1971, Vol. I, pp. 218-20.)。そこにはトレンズの『メルボーン卿宛て書簡』について次のように書いてある。

「あなたはその全部に賛成はしないだろうし、私もまたそれに自らが完全に満足していると言うことはできない。」

(Overstone, *ibid.*, p. 219.)

オブライエンはその理由を預金についてのトレンズの上に見たような把握にオーヴァストーンが問題を感じたからだと指摘している(O'Brien, *ibid.* note 1.)。その点についてはオーヴァストーンの1857年1月21日付けトレンズ宛て書簡(Overstone, 1857b, O'Brien, *ibid.*, Vol. II, pp. 713-17.)が裏づけであるように見える。それは預金についてのトレンズの把握を激しい調子で批判したもので(O'Brien, *ibid.*, Vol. I, pp. 112-3.)、この批判を受けてトレンズはその年に第二版を刊行した *Principles and Practical Operation of Sir Robert Peel's Act* (Torrens, 1st ed., 1848, 2nd ed., 1857) の第三版の公刊を延期したほどであった(Torrens, 1858b, O'Brien, *ibid.*)。オーヴァストーンの批判がそれほどに激しいものとなったのは、貨幣と預金とを区別することが「1844年法を支える者が依拠すべき土台そのもの」(Overstone, *ibid.*, Vol. II, p. 714.)であったからで、あまつさえその理解を誤ることが他ならぬトゥックを利することになると考えたからである

(Overstone, *ibid.*)<sup>10)</sup>。

それ故、1837年から1840年を経て、通貨学派はオーヴァストーン、トレンズ、そしてノーマンを中心としてトゥックに対抗するグループとして形成されつつあったとは言え、またその政策の核心はイングランド銀行二部門分割案として明確化されていたとは言え、その理論的土台をなす貨幣把握の部分については未だ三者の理解は一体のものではなかった。その限りにおいて、通貨主義とは何かという問題への答もまだ得られたとは言えないのである。

#### 文献

*Parliamentary Debates*, 3rd Series, Vol. XVII, 1833.

House of Commons, 1832 July, 'Report from the Secret Committee appointed to inquire into the Expediency of renewing the Charter of the Bank of England, and, into the System on which Banks of Issue in England and Wales are conducted,' (*Parliamentary Papers* 1831-2.)

Anonymous, 1837, *Mr. Samuel Jones Loyd's Reflections on the Causes and Consequences of the Pressure on the Money Market*, *The Morning Chronicle*, No. 21,002, March 3, 1837.

Clapham, Sir J., 1966, *The Bank of England II*, London. 英国金融史研究会訳『イングランド銀行 その歴史 II』, ダイヤモンド社, 1970年.

Gregory, T. E., 1928, *An Introduction to Tooke and Newmarch's A HISTORY OF PRICES AND OF THE STATE OF CIRCULATION FROM 1792 TO 1856*, London. 藤塚知義訳『物価史』第1巻「序説」, 東洋経済新報社, 1978年.

Marx, K., 1894, *Das Kapital*, Band III, *Marx-Engels Werke*, Band 25, Dietz Verlag, 1964, 邦訳『マルクス＝エンゲルス全集』第25巻のb, 大月書店, 1964年.

Norman, George Warde, 1838, *Remarks upon Some Prevalent Errors with Respect to Currency and Banking, and Suggestions to the Legislature and the Public as to the Improvement of Monetary System*, London.

—, 1841, *Letter to Charles Wood ESQ., M.P. on Money and the Means of Economizing the Use of It*, London.

O'Brien, D. P., 1965, 'The Transition in Torrens' Monetary Thought', *Economica*, New Series, XXIII, August.

(10) オーヴァーストーンのこの書簡の意義については詳しくは別稿に譲る。なお、オーヴァーストーンの理論については小林(2003)参照。

- , ed., 1971, *The Correspondence of Lord Overstone*, 3 vols. Cambridge.
- , 1975, *The Classical Economists*, Oxford.
- Overstone, L.(Samuel Jones Loyd), 1837a, *Reflections suggested by a Perusal of Mr. J. Horsley Palmer's Pamphlet on the Causes and Consequences of the Pressure on the Money Market*, London.
- , 1837b, *Letter to G. W. Norman* (27 Feb. 1837. No. 30 in O'Brien, 1971, Vol. I, pp. 218-20.)
- , 1837c, *Further Reflections on the State of the Currency and the Action of the Bank of England*, London.
- , 1840a, *Remarks on the Management of the Circulation and on the Condition and Conduct of the Bank of England and the Country Issuers during the year 1839*, London.
- , 1840b, *A Letter to J. B. Smith, Esq., President of the Manchester Chamber of Commerce*, London.
- , 1840c, *Effects of the Administration of the Bank of England. A Second Letter to J. B. Smith, Esq., President of the Manchester Chamber of Commerce*, London.
- , 1844, *Thoughts on the Separation of the Departments of the Bank of England*, London. (privately in 1840.)
- , 1847, *The Petition of the Merchants, Bankers, and Traders of London, against the Bank Charter Act; with comments on each clause*, London. (Torrens と共著)
- , 1857a, *Tracts and other Publications on Metallic and Paper Currency*, London.
- , 1857b, *Letter to Robert Torrens* (21 Jan. 1857. No. 399 in O'Brien, 1971, Vol. II, pp. 713-7.)
- Palmer, Horsley, 1837a, *The Causes and Consequences of the Pressure upon the Money-Market; with a Statement of the Action of the Bank of England from 1st October, 1833, to the 27th December, 1836*, London.
- , 1837b, *Reply to the Reflections etc. etc. of Mr. Samuel Jones Loyd, on the Pamphlet Entitled "Causes and Consequences of the Pressure upon the Money-Market."*, London.
- Pennington, James, 1829?, Paper communicated by Mr. Pennington in Tooke's *Letter to Lord Grenville* (Tooke, 1829, pp. 117-127.)
- , 1836-7?, Paper communicated by Mr. Pennington in Torrens' *Letter to Melbourne* (Torrens, 1837c, pp. 76-80.)
- , 1838, Letter addressed to Tooke (April 10, 1838) in Tooke's *History of Prices*, Vol. II (Tooke, 1838, pp. 369-54.)
- , 1840?, Paper communicated by Mr. Pennington in Tooke's *History of Prices*, Vol. III (Tooke, 1840, pp. 279-88.)
- , 1963, Sayers ed., *Economic Writings of James Pennington*, No. 17 of Series of Reprints of Scarce Works on Political Economy, London.
- Political Economy Club, 1921, *Minutes of Proceedings, 1899-1920, Roll of Members and Questions Discussed, 1821-1920 with Documents Bearing on the History of the Club*, Vol. IV, London. Reprinted by NIHON KEIZAI HYORON SYA, Tokyo, 1980.
- Ricardo, David, 1826, *Plan for the Establishment of A National Bank*, Sraffa, P. ed., *The Works and Correspondence of David Ricardo*, Cambridge, 1956, Vol. IV, pp. 270-300. 石垣博美訳「国立銀行設立試案」, 『デイヴィッド・リカード全集』, 雄勝堂書店, 1970年.
- Ricardo, Samson, 1837, *Observations on the Recent Pamphlet of J. Horsley Palmer, Esq. on the Causes and Consequences of the Pressure on The Money Market, &c.*, London.
- Robbins, Lionel, 1958, *Robert Torrens and the Evolution of Classical Economics*, London.
- Smith, J. B., 1837, *Effects of the Administration of the Bank of England, Reply to the Letter of Samuel Jones Loyd, ESQ.*, London.
- Tooke, Thomas, 1829a, *A Letter to Lord Grenville, on the Effects ascribed to the Resumption of Cash Payments on the Value of the Currency*, London.
- , 1829b, *On the Currency in connection with the Corn Trade, and on the Corn Laws, in a Second Letter to Lord Grenville*, London.
- , 1838, *A History of Prices, and of the Circulation, from 1793 to 1837; preceded by a Brief Sketch of the State of the Corn Trade in the Last Two Century*, Vols. I&II, London. 藤塚知義訳, 『物価史』第1, 2巻, 東洋経済新報社, 1978-9年.
- , 1840, *A History of Prices, and of the Circulation, from 1838 and 1839, with Remarks on the Corn Laws, and on some of the Alterations proposed in our Banking System*, Vol. III, London. 藤塚知義訳, 『物価史』第3巻, 東洋経済新報社, 1980年.
- , 1844, *An Inquiry into the Currency Principle; The Connection of the Currency with Prices*, London. 玉野井芳郎訳『通貨原理の研究』, 世界古典文庫, 1949年.
- , 1848, *A History of Prices, and of the Circulation, from 1839 to 1847 inclusive: with General Review of the Currency Question, and Remarks on the Operation of the Act 7 & 8 Vict. c. 32*, London. 藤塚知義訳, 『物価史』第4巻, 東洋経済新報社, 1981年.
- Torrens, Robert, 1819, *A Comparative Estimates of the Effects*

- which a Continuance and a Removal of the Restriction upon Cash Payments are respectively calculated to produce: with Strictures on Mr. Ricardo's Proposal for Obtaining a Secure and Economical Currency*, London.
- , 1837 a, *A Letter to The Right Honourable Lord Viscount Melbourne on the Causes of the Recent Derangement in the Money Market, and on Bank Reform*, 1st edition, London.
- , 1837 b, Article in *The Morning Chronicle*, No. 21,002, March 3, 1837.
- , 1837 c, *A Letter to The Right Honourable Lord Viscount Melbourne on the Causes of the Recent Derangement in the Money Market, and on Bank Reform*, 2nd edition, London.
- , 1837 d, *Supplement to a Letter Addressed to the Right Honourable Lord Viscount Melbourne on the Derangement in the Money Market, and on Bank Reform*, London.
- , 1840, *A Letter to Thomas Tooke, Esq. in Reply to his Objections against the Separation of the Business of Bank into a Department of Issue, and a Department of Deposit and Discount: With a Plan of Bank Reform*, London.
- , 1842, *A Letter to Right Hon. Sir Robert Peel, Bart., M.P., etc., etc., on the Condition of England and on the Means of Removing the Causes of Distress*, London.
- , 1844, *An Inquiry into the Practical Working of the Proposed Arrangements for the Renewal of the Charter of the Bank of England and the Regulation of the Currency with a refutation of the Fallacies advanced by Mr. Tooke*, 1st and 2nd editions, London.
- , 1847, *The Petition of the Merchants, Bankers, and Traders of London, against the Bank Charter Act; with comments on each clause*, London. (Overstoneと共著)
- , 1848, *The Principles and Practical Operation of Sir Robert Peel's Bill of 1844 Explained, and Defended against the Objections of Tooke, Fullarton and Wilson*, London.
- , 1857, *The Principles and Practical Operation of Sir Robert Peel's Act of 1844 Explained, and Defended: Second Edition. With Additional Chapters on Money, The Gold Discoveries and International Exchange; and a Critical Examination of the Chapter "On the Regulation of a Convertible Paper Currency" in Mr. J. S. Mill's PRINCIPLES of POLITICAL ECONOMY*, London.
- , 1858 a, "Tracts and other Publications on Metallic and Paper Currency. By the Right Honourable Lord Overstone. 1857. Collected by J. R. McCulloch, Esq." (Article IX of *Edinburgh Review*, CVII, pp. 248-93.)
- , 1858 b, *The Principles and Practical Operation of Sir R. Peel's Act of 1844 Explained, and Defended: Third Edition, Revised and enlarged: Comprising Critical Examination of the Report of the Lord's Committee of 1848, upon National Distress; of the Novel Principles of Currency Propounded by Mr. Tooke and Mr. Wilson; and of the Chapter on the Regulation of Currency in Mr. J. S. Mill's PRINCIPLES of POLITICAL ECONOMY*, London.
- 金井雄一, 1989, 『イングランド銀行金融政策の形成』, 名古屋大学出版会.
- 小林賢齋, 2003, 「オーヴァーストーンの『1844年銀行法弁護』: 『銀行法特別委員会報告書(1858年)』による覚え書」, 武蔵大学学会『武蔵大学論集』, 第50巻第2号, 145-199ページ.
- 新庄博, 1958, 「オーヴァーストーンの通貨論——一八五八年のEvidenceを中心として」, 神戸高等商業学校商業研究所『国民経済雑誌』第98巻第4号, 33-49ページ.
- 竹内 洋, 1997, 「地金論争期トレンズの貨幣把握」, 『宮城教育大学紀要』, 第32巻.
- , 1999, 「トレンズの地金主義批判と貨幣把握」, 同上, 第34巻.
- , 2000, 「『転換』期トレンズの貨幣観と銀行改革——『メルボーン卿宛書簡』(1837年)の分析——」, 同上, 第35巻.
- , 2002, 「通貨主義へのトレンズの歩み——展望——」, 同上, 第37巻.
- 野村重明, 1976, 「通貨論争と恐慌——オーヴァーストーンとトゥックを中心に」, 岐阜経済大学学会『岐阜経済大学論集』, 第10巻第1, 2号, 93-114ページ.
- 深町郁彌, 1969, 「オーヴァーストーンの通貨統制論」, 九州大学『経済学研究』, 第26巻第5, 6号, 235-65ページ.
- 藤塚知義, 1973, 『経済学クラブ——イギリス経済学の展開——』, ミネルヴァ書房.
- 峰本暁子, 1978, 『イギリス金融史論——通貨論争の潮流——』, 世界書院.

(平成22年9月30日受理)